

CSW62 報告書

春藤優

「あなたを変えなければ他の誰かは変えてくれない。」

これは私が CSW62 に参加して一番エンパワーメントされた言葉である。会期中、ご縁があって国連で事務次長として軍縮を担当されている中満泉さんにお会いした時、かけていただいた言葉だ。CSW62 の開会式で国連事務総長のグテーレスさんが「自分はフェミニストである。」と述べた上で、国連内のジェンダーパリティに取り組んでいると述べたことについて、「女性の地位向上のために男性が果たすべき役割はあるか？」と質問をしたところ、男性というより高い地位にいる人が変わらなくてはならず、その人達は勝手には変わってくれないし誰かが変えてくれるということもないと前置きしたうえで、冒頭の言葉を中満さんは私たちにかけてくださった。中満さんだけではない。世界中のフェミニスト、同世代の若いアクティビストや同じ若者支援の仲間との交流を通して、改めて私がやらなくてはいけないのだという強い気持ちになった。

CSW はこうした強い気持ちを持たせてくれただけでなく、この気持ちを生かし、社会を変えていく方法論を教えてくれる場であった。特に NGO CSW/ NY が開催していたアドボカシートレーニングでは「何を変えるために」「何を目標に」「どの場所で」「どのレベルで」「どういった枠組みを利用し」「いかなる形で」アドボカシーを行うのかを徹底的に考えさせられた。このトレーニングは、自分自身のキャリアを考えることに結果的につながった。私は、ニューヨークに行って国際的な議論を目の当たりにしたからこそ、この日本で女性の環境改善（特にマイノリティ性を持った女性）に、専門性を持って取り組みたいと思った。帰国後は、CSW で学んだことを今行っている活動に生かしつつ、将来的に人を救う強力な武器になる専門性を身に着けるべく進学に向けての勉強を始めている。

私は、日本の女性の状況を変えなければならないと考える。CSW に参加して視野が広がり、気が大きくなったから言っているのではない。視野が広がったからこそ、見える課題は多くなり、より一層の危機感を抱いている。CSW のいたるところで感じられた複合的差別への視点は、複数の要因により女性でいることで受ける不利益に加え、その他の不利益も重なり、ますます援助や救済の手が届かなくなっている事実を可視化した。この複合的な状況が見えた危機感と怒りを手を動かすためのエネルギーに変えていきたい。CSW で私が出会ったフェミニストは、国連という華やかな場に来ていたものの、日常では目の前の課題に冷静さと戦略を持って向き合い、たとえすぐに現実が変わらなくても声をあげ、手を動かしてきた人たちであった。私も、そういうフェミニストにならなくてはいけないのだ。ほかの誰でもない私を変えるのだという強い思いとそのための方法論を学んだ CSW62 であった。